

A Report Regarding Visits to Villages in Northern China (13): Shanxi Province, September 2017

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Benno, Saiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054036

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



華北農村訪問調査報告 (13) - 2017年9月, 山西省 -

弁納才一^{1*}

2018年9月10日受付, Received 10 September 2018
2018年11月30日受理, Accepted 30 November 2018

A Report Regarding Visits to Villages in Northern China (13) : Shanxi Province, September 2017

Saiichi BENNO^{1*}

Abstract

This paper serves as a memorandum regarding visiting research trips to a number of villages in northern China. The main researchers were Masao Uchiyama, Saiichi Benno, Jianmin Qi, Hiroshi Tanaka, Tatsuya Koizumi, Jun Lu, and Jinhua Xi. In September 2017, we conducted our investigations by interviewing residents in the following three villages in Shanxi Province, namely, J and G villages in L County and Y village in H City. Apart from these villages, we also visited the Faculty of History at Nankai University in Tianjin, two villages near Y village in Shanxi Province, and four villages in Beijing.

Key Words: family history, Northern China, personal history, villages

キーワード: 華北, 農村, 家族史, 個人史

I. はじめに

筆者は、2007年12月下旬に初めて華北農村を訪問して聞き取り調査に参加してから、これまでに10年間余りにわたって中国各地の農村において訪問聞き取り調査を実施してきた(弁納, 2008, 2010, 2011a, 2011b, 2011c, 2012a, 2012b, 2013, 2015a, 2015b, 2016, 2018)。

今回(2017年度)は、筆者が研究代表者を務める科学研究費助成事業による共同研究¹⁾の最終年度にあっていたが、主に政治的な事情によって河北省保定市の農村における聞き取り調査を実施することはできなかった。今回の訪中の旅程(2017年9月13日(水)~26日(火)の13泊14日)は、以下のとお

りである。

9月12日(火)は空港近くの羽田のホテルに前泊し、13日(水)に羽田(NH961便9:25発)から北京(12:20着)へ飛び、14日(木)には中国社会科学院経済研究所や北京図書館などで文献資料調査を行い、15日(金)には内山雅生・弁納才一・祁建民・田中比呂志の4人が天津市にある南開大学歴史学院を訪問して同院長の江沛氏などと意見交換を行った。16日(土)には地下鉄を利用して北京市の通州区小街村と順義区沙井村を参観し、17日(日)はマイクロバスを借り上げて北京市門頭溝区内の「民俗村」とされている2村を参観した。

18日(月)午前、北京西(G91便8:40発)から太原南(11:12着, D2513便11:57発)を経由して靈石東

¹⁾金沢大学人間社会研究域経済学経営学系 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Faculty of Economics and Management, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

*連絡著者 (Author for correspondence)

(12:47着)に移動し、午後は臨汾市近郊の高河店村を訪問し、19日(火)はH市水利局長の案内によって七里峪を参観した。20日(水)はJZ村で聞き取り調査を行った。21日(木)はH市水利局長の案内によって、Y村・X村・J村を訪問した。22日(金)はG村で聞き取り調査を行った。23日(土)、靈石東(D5302便8:56発)から太原南(9:41着、G610便11:00発)を経由して北京西(13:44着)に移動し、24日(日)は聞き取り調査の整理を行うとともに、今後の中国農村調査の在り方について意見交換を行った。25日(月)は中国社会科学院経済研究所で文献資料調査を行った。26日(火)、北京(NH964便8:25発)から羽田(12:50着)へ移動し、無事に帰国した。

今回の参加者(部分参加を含む)は、年齢順に内山雅生・弁納才一・祁建民・田中比呂志・古泉達矢・盧瑯・佐藤淳平・前野清太郎・菅野智博・席金花・和田友美・佐々木麻衣・郭允哲・久積龍一の計14人である²⁾。だが、今回、中国農村における聞き取り調査に参加したのは、内山・弁納・祁・田中・古泉・盧・席の7人だった。

II. 農村聞き取り調査

1) 山西省L県J鎮J村

聞き取り日時：2017年9月20日(水) 15:15～17:00

聞き取り場所：L県J鎮J村社会服務管理中心2階

聞き取り対象者：CCQ

聞き手：弁納才一・毛来靈

通訳：毛来靈

1-1) CCQの個人史

- ・元書記のCZSの長男として1974年12月28日に生まれた(2017年9月現在、32歳)。幼稚園に1年間通い、7歳から本村の小学校で5年間学んだ。その後、J鎮中学校で3年間学んだ。同中学校ではJ鎮にある宿舎に住んでいたが、週末には徒歩あるいは自転車で帰省した。
- ・中学校を卒業した後、高校へは進学せず、本村村民委員会が経営する炭鉱会社で関連資材などを購入する仕事に10年以上にわたって従事し、農業にも従事したことがあった。そして、20歳代の時(1992～1993年頃)、炭鉱会社における仕事上の必要性から、自動車学校に半年間ほど通って自動車の免許を取得した。その時にかかった学費は5,000

～6,000元だった。

- ・22歳の時、河南省少林寺系列下にある資寿寺(「老廟」)の近くのS村出身の妻と結婚し、2017年現在、2人の子供がいる。
- ・2000年に中国共産党員になった。2011年に本村の党支部委員会の書記に選出されて連続2期(1期3年)務めてきて2017年9月現在に至っている。次期の党支部委員会選挙は、中央政府の党大会が今年10月に開催される予定になっていることから、当初予定されていた今年9月から翌10月にずれ込むだろう。党支部委員会選挙で党支部委員を選出した後、書記・副書記などを互選することになっている。

1-2) CCQの家族史

- ・祖父(CJA, 1912年生まれ)は、村内の知識人(「二先生」と呼ばれていた)として村民の相談役を務めていて、天津市で商売をしていたこともあったというが、土地改革次期には「貧農」と階級区分された。また、祖母(QFY, 1913年生まれ)は、L県城内の出身である。
- ・父(CZS)には1人の兄と1人の姉がいる。父の兄(CTS, 76歳)は、本社区内の病院で夫婦ともに医者をやっており、その妻(CRX, 69歳)は私(CCQ)の母の姉である。その夫婦の次男(CSQ, 45歳)が病院を継いで医者をやっており、その妻(CJC, 45歳)は本村人である。長男(CYQ, 54歳)は元々トラックを所有して運送業に従事していたが、4～5年前から運送業が不景気となったので、運送会社にトラック運転手として雇われるようになり、その妻(MJX, 53歳)は本村人である。長女(CWH, 48歳)は本村のCWH(49歳)と結婚し、次女(CDQ, 43歳)も本村人と結婚したが、その夫はすでに死去しており、三女(CYQ, 34歳?)はL県中学校の教師と結婚し、四女(CLQ, 31歳?)は楡次で原付バイクの販売をしているZLB(31歳)と結婚した。
- ・父の姉(CQS, 80歳)はJ県H村の農民へ嫁し、7人くらいの子供がいる。そのうち、長女は企業家(石炭関連会社)となっており、その他の子供は炭鉱労働者・トラック運転手・商売などをやっている。
- ・母(CEX, 辰年生まれ、65歳)は、X県の出身で、1人の弟と6人の姉妹がいる。母の弟(CS, 54歳)

は、X県D郷C村で農業に従事している。母の姉（CRX）は、父（CZS）の兄（CTS）の妻である。母の一番下の妹（CRQ, 47歳）は、本村人と結婚したが、その夫の兄弟が青海省西寧市で商売をしていたので、そのつてを頼って西寧市で商売をしている。それ以外の母の3人の妹についてはあまりよく知らない。

- ・私（CCQ）には1人の姉（CHQ, 45歳）と1人の弟（CZQ）がいる。姉（CHQ）は、高校を卒業した後、L県城内に住み、L県環境保護局に勤務し、姉の夫は同じくL県煤炭管理局に勤務しており、2人の子供がいる。そのうち、上の子供は会計・財政関係の大学を卒業したばかりだが、2017年9月現在、まだ就職活動中で、下の子供はまだ小学生である。弟（CZQ）は、中学校を卒業した後、夫婦でいっしょに本村内でレストランを経営しており（聞き取り調査を終えて夕食を食べた）、2人の子供がおり、高校生である。

2) 山西省H市Y村

聞き取り日時：2017年9月21日（木）9:50～11:30

聞き取り場所：山西省H市Y村WBH宅（Y集中供水管理站1階）

聞き取り対象者：WBH

聞き手：内山雅生・弁納才一・祁建民・田中比呂志・古泉達矢・盧珺・席金花

通訳：祁建民

2-1) 四社五村

- ・C社とL村の「大祭」では、劇団を呼ばず、演劇はなく、会食のみとなっている。今年（2017年）の「大祭」の主催村だったL村では、党員活動室で「紅白理事会」（冠婚葬祭の互助組織）のcockが調理して食事を提供した。また、2017年9月現在、L村では「水権」に基づく水をほとんど利用していない。
- ・Y村とX村の「大祭」では、演劇と会食がある。演劇は、Y村が7回、X村が5回上演され、劇団の上演費用は1回につき2,000元を支払っている。ただし、近年は観客が減っており、特に若い人は演劇の歌を聴いてもわからないので、関心もなく、演劇を見に来なくなっているという。
- ・今年（2017年）は、「四社五村」が「三社四村」になりかねないという危機的状況が生まれていた。

すなわち、今年の清明節の時に行われた「小祭」には参加していたC社（QD村・QX村）が「水権」について話し合った結果、分担金を支払わず、「大祭」には参加しなかった。その分担金の不足分（8日間の「水権」4,200～4,300元）を今年の「大祭」の主催村であるL村が負担した。そして、計28日間の「水権」のうちC社の「水権」計8日間分を2日間分ずつ他の4ヶ村に分配し、L村が8日間、Y村が11日間、X村が8日間、K村が11日間となった。

- ・C社としては、水道が整備された結果、実際には本村民がすでに水を利用していないのに、負担金を支払うことに対して村民の理解がえられないという事情があった。実は、C社では、数年前から「水権」を他の村に貸していた。例えば、X村のYEW（X村の会首・副村長、27歳）がC社の「水権」を4,000元余りで購入してY荘に約8,000円で売却していたが、昨年（2016年）、H市水利局が費用を負担して四社五村とは別の水源地を持つY村からY荘まで水道ができたので、C社からの水を必要としなくなっていた。

- ・来年（2018年）は、Y村が四社五村の大祭を主催する村になっているが、C社は負担金を払わなくてもよければ、大祭に参加するが、もし負担金を支払わなければならないのならば、大祭には参加せず、「水権」も放棄し、「四社五村」から離脱すると言っているという。

- ・昼食時にレストランにやって来たHJHは、「四社五村」を伝統文化として維持していくべきであると力説し、自分が元気なうちは「四社五村」の伝統を守っていくと話していた。そして、2017年7月にH山文化学会（？）会議が開催されたが、中国の大学の研究者なども参加するなかでHJHは「四社五村」について語ったようである。次回の2018年に開催される会議には我々（日本人）も参加できると同会議に出席することを誘われた。

2-2) 村管

- ・県政府から各農村には地方公務員を目指す大学生が「村管」として派遣されている。QX村に派遣された「村管」は、「四社五村」の歴史的背景と伝統文化としての意義を理解していたことから、「水権」や大祭・小祭に関心を持っていたが、上述のような事情から、QX村の村長はすでに関心を持つ

ていないという。そして、Y村にも「村管」が派遣されている。

- ・「村管」に就任すると一定の手当がつくが、この「村管」を経験することによって正式の地方公務員試験に合格する上で有利になるという見方と基本的には関係がないという全く異なった見方がある。なお、「村管」制度については、次回、本村の幹部やその事情に詳しい毛来霊に話を聞いてみたい。

2-3) WBHの家族史

- ・父 (WSN, 80歳, 寅年生まれ) は、河南省新郷市Y県の出身である。1942年頃、河南省で大干ばつが発生すると、「石匠」(石臼を磨く石工) をしていた祖父が父を連れて山西省のL村に移住し、L村でもやはり「石匠」として働いて儲けたお金で約200畝もの土地を買い集めた。だが、その後、アヘンを吸引して土地・財産を失い、土地改革時期には「貧農」と階級区分された。そして、1960年にY村に移住して来てからは農業に従事していた。
- ・父 (WSN) には、1人の兄と2人の姉及び2人の妹がいた。父の兄 (WYN, 83歳) は「石匠」の仕事を継いで、Y村に住んでいるが、その妻はすでに死去している。また、2人の姉及び2人の妹のうち、次女が広勝寺の近くの村に嫁した以外はY村内の村民に嫁し、四女 (WRH) 以外は皆すでに死去している。
- ・母 (MQY, 74歳) は、(WSN) と同じ河南省新郷市Y県の出身で、やはり1942年頃の大干ばつの際にL村に避難してきた時に父 (WSN) と知り合った。
- ・兄 (WHH, 1962年・寅年生まれ) は、Y村に住んでおり、その妻 (ZGM, 1962年生まれ) はY村の出身である。
- ・長男 (WW, 24歳) は、2017年現在、元々はWBHの林檎農園だった土地 (4畝) に玉蜀黍を栽培している以外に、ガソリン・スタンドも経営している。玉蜀黍は、かつて販売価格が高かった時は1斤につき1.1円で販売できたものの、最近は1斤につき0.7元まで販売価格が低下しているが、手間暇がかからないので、栽培を続けている。長男 (WW) の妻 (24歳) は、Y村の出身である。
- ・WBHは、昨年 (2016年)、数十万円で新車 (フォルクスワーゲン) を購入したが、自動車の運転免許は持っていないという。だが、県政府の交通警

察に友人がいるので、無免許運転でも全く問題はないと豪語していた。今の再婚した若い妻は自動車の運転免許を持っており、当日は昼食をとるレストランまでWBHを乗せて運転していた (WBHが昼食で酒を飲むつもりだったため)。実際、昼食ではWBHだけが白酒を飲んでいて、また、長男 (WW) はガソリン・スタンドも経営しているが、自家用車を所有していないという。

2-4) 林檎栽培

- ・林檎農園を灌漑するための「水管」(水道管) は、H市水利局が費用を負担して設置した。灌漑水の利用料金は1時間につき40~50元である。
- ・WBHは、2017年現在、林檎の栽培はしていない。元々持っていた林檎農園 (4畝) はすでに息子に譲った。
- ・4~5畝の林檎農園を経営しているCSH (51~52歳) は、2017年9月現在、70~80万元 (そのうち、70%が自己資金、その他は友人からの借金) の費用をかけて、本村の「中共黨員活動室」の近くに林檎の保冷倉庫 (100万斤の林檎を収納して保冷できる) を建設中で、間もなく完成する予定であるという。CSHから話を聞いた後に、その林檎保冷倉庫内を見学させていただいた。

2-5) 趕集

- ・Y村の「趕集」(定期市) は旧暦で2, 5, 8のつく日に開かれている。また、どういう脈絡だったのかは不明だったが、洪洞県苑川では旧暦で1, 4, 7のつく日に趕集が開かれているという。

2-6) 「加水」

- ・2017年9月現在、Y集中供水管理駅の近くにある高速道路のサービス・エリアが工事中で、閉鎖しているため、WBHは自宅として住んでいるY集中供水管理駅の水を高速道路を通行しているトラックなどの大型車のエンジンの冷却用として販売している。このような冷却用の水を提供することを「加水」という。なお、我々が訪問した日は、WBHが我々に応対するために、叔母のWRH (父親の一番下の妹) に「加水」の店番を依頼していたようである。
- ・2017年9月現在、WBHがY集中供水管理駅に居住しているのは娘が通っている幼稚園に近いからであり、毎日、WBH本人が愛用の自家用バイクで娘を送迎しているという。

- ・Y集中供水管理駅の近くには古くからの水源地があり、また、その周辺の畑には様々な農作物が栽培されていた。

3) 山西省L県N鎮G村

聞き取り日時：2017年9月22日（金）9:50～11:40

聞き取り場所：L県N鎮G村村民委員会2階

聞き取り対象者：LZQ（72歳）

聞き手：弁納才一・毛来霊

通訳：毛来霊

G村でも、党支部委員会と村民委員会が同じ建物に入居しているが、同村村民委員会委員によると、普段は本村の書記をはじめとする党支部委員会委員は「副業」（事実上の本業？）に忙しく、この建物にはほとんど顔を出すことがないという。ただし、当日の昼食には同村の党支部委員会の書記（LYJ）が顔を出した。LYJはかつて郷政府で働いていたという。

3-1) 会計

- ・1980年から2017年現在まで会計をやっている。もう会計をやめたいが、後継者が見つからないので、仕事を続けている。手当が少ないので、若い人は会計の仕事をやりたいがらない。
- ・会計への手当として、L県政府から毎月450元と村民委員会から年末にいくらか支給されている。なお、村民委員会委員には県政府から毎月45元と村民委員会から年末に数千元支給されている。

3-2) 本村の収入

- ・2017年現在、「洗煤廠」（洗炭工場）・肥料（有機肥料）工場・「加油站」（ガソリン・スタンド）・「汽修」（トラックや自動車などの修理工場）などの用地からの賃貸料が本村の主要な収入源の1つとなっている。すでに10年前から隣のF村の人やL県の他村の人が「洗煤廠」を経営しており、また、昨年（2016年）、肥料工場は河北省の人が経営するようになり、さらに、今年（2017年）はL県の他村の人がガソリン・スタンドを経営するようになった。
- ・2006年1月から農業税が廃止されたが、2017年現在、穀物の栽培に対しては国から助成金が支給されている。その中でも、小麦に対する助成額が最も高いが、本村は小麦の栽培には不向きなので、小麦に次いで助成額が高い玉蜀黍を栽培している農家

が多い。玉蜀黍に対する助成金額は、1畝につき40元で、「信用社」の個人口座に振り込まれている。ただし、本村の土地は計200畝ほどであるが、灌漑のできる農地は約100畝で、本村民は170戸約500人なので、1人当たりの農地は0.2畝にすぎないことから、玉蜀黍の栽培に対する助成金額は1人当たり8元にすぎないことになる。そして、5～6年以上前から収穫した玉蜀黍はH市から来た商人がまとめて買い付けている。玉蜀黍の買付価格は、かつては1斤につき1元余りだったが、2017年現在は1斤につき0.8元にまで低下している。これらの玉蜀黍は、豚や鶏の飼料となる。なお、灌漑できない約100畝の土地が工場用地や林業用地として利用されている。

3-3) 「出租房」

- ・2017年9月現在、本村には300余りの外来人が住んでいるが、全て本村民の提供する「出租房」（間借り）に入居している。この家賃収入も、本村民にとっては重要な収入源になっている。
- ・最近、不景気で仕事も少ないので、部屋を借りる人も減ってきているために、家賃収入も低下している。

3-4) 養老年金

- ・社会保険からの養老年金として、60歳からは月額105元、70歳からは月額125元が支給されている。2017年現在、60歳以下で仕事をしている人は毎月の給料から年金積立金を控除されている。さらに、75歳からは国の老齢委員会から年に1回「高齢補助金」が支給されている。

3-5) LZQの家族史

- ・子供は2人の息子と2人の娘がいる。
- ・長男（LRB, 49歳）は、家族でL県城内に住み、トラックの運転手をしているが、月給は約5,000元である。また、長男の息子（26歳）はL県城内で「打工」として働き、月給は約1,000元である。一方、長男の娘は北京市の大学を卒業したばかりだが、2017年9月現在でもまだ正式の社員として就職することができず、臨時工として働いている（就労場所は不詳）。
- ・次男（LRB, 40歳近く）は、家族でD村に住み、トラックの運転手をしており、2人の息子がいる。
- ・娘の1人はJ県H鎮に嫁して専業主婦をしており、また、もう1人の娘はN電廠で夫婦で働いている。

3-6) 戸籍制度

・「戸口」登記簿には「農業」（農民戸籍）と「非農業」（都市戸籍）の区別がある。2人の息子も「戸口」は「農業」である。2017年現在、「身分証」には戸籍の区別は記載されていないという。

3-7) その他

- ・本村村民委員会では、2016年から本村出身の大学合格者に対して奨学金として1人につき1,000円を支給している。本村出身の大学合格者は、2016年が2人、2017年が3人（そのうち1人は大学院修士課程の合格者）だった。
- ・今年（2017年）5月から10月まで幹線道路沿いの農村をきれいにする「折危治乱」運動（詳細は不詳）が展開している。
- ・本村の川（汾河）向こうにある村はH村で、新しい「汽修」（各種車輛の修理工場）が見える。

Ⅲ. 訪 問 地

1) 北京市

9月14日（木）、日本で事前予約をしていた北京市内のホテル（北京京浜飯店）をそのホテル側の一方的な都合で勝手にキャンセルされていたために、急遽、別のホテル（国誼飯店）に1泊することになった。

翌15日（金）は、京浜飯店の斜め向かい側にある総合デパート「天意」が閉店セールの日だったために、買い物客が殺到して周辺の道路が大渋滞となり、ホテルの移動には想定以上の時間を要した。

1-1) 9月16日（土）

地下鉄を利用して、戦前に日本が調査を実施した北京市通州区小街村³⁾（1号線延長線・八通線臨河里駅下車、徒歩約5分）と順義区沙井村⁴⁾（15号線南法信駅下車、徒歩約10分）を参観した。

午前中は、梨園鎮小街村（最寄りのバス停は「小街村南口」）を参観したが、村民委員会の場所も確認することができず、周辺地域を徘徊していると、元村民であるという老人に出くわした。そして、その元村民によると、元々の小街村は公園として整備されているという。周辺にはすでに高層マンションが建ち、道路の拡幅工事が行われていた。なお、かつて小街村だったところの一部には都市化に伴って建設されたと思われる巨大で豪華なレストランは廃墟と化していた。

午後は、仁和鎮沙井村を訪問したが、本村のほぼ全域が「批発市場」（卸売市場）すなわち問屋街となっていた。そこにはナンバープレートに「老年代步車」と記された電気自動車が数台駐車していた。そして、沙井村村民委員会の看板を撮影していると、警備員らしき人物が何をしに来たのかと詰問してきたので、すぐにその場を離れたものの、自動車で行き先を間違っていたようである。沙井村に隣接する石門村（一部が更地となっており、工事関係者の駐車場として利用され、数匹の番犬がいた）を通過し、地下鉄石門駅で乗車してホテルに戻った。

以上の3ヶ村（小街村・沙井村・石門村）は、都市化して農村は完全に消滅しており、農地を見ることはできなかった。

1-2) 9月17日（日）

マイクロバスを借り上げ（ガソリン代込みで1,200円）、前野清太郎が参観を強く希望して事前に自ら下調べをしていた北京市門頭溝区⁵⁾の「郷村民俗旅游村」のうち、妙峰山鎮嶺角村と大台街道千軍台村の2ヶ村を参観した。道路上ではサイクリングをしている自転車を多く見かけた。門頭溝区の大部分は山間部であるが、農村へ行く道路は完全に舗装されており、各村には健康遊具と公共トイレが整備されていた。我々が村内を散策しても、特に警戒心を見せることもなかったことから、特に週末は多くの中国人が訪問・参観しているようである。

いずれにせよ、上記の2ヶ村内で若者の姿を見かけることはほとんどなかった。

嶺角村は、村全体が改築・修築・新築中で、工事車両以外の自動車は本村の住宅地域へは立ち入ることが出来なかった。その建設関係車両が通過する度に土埃が舞い上がっていた。本村の入り口近くの「北京市門頭溝区妙峰山鎮嶺角村村務監督委員会」（村民委員会・村政府？）の周辺には「北京市嶺角村養蜂專業合作社」や「北京市門頭溝区妙峰山鎮嶺角村股份經濟合作社」の看板も見られた。そして、本村の小川は、湧き水があったためか、非常にきれいだった。しかも、北京市街地よりも標高が高いためか、涼しく、空気も良かった。昼食は、「農家楽」（田舎料理を提供するレストラン）で食べた。小型トラックが後部の荷台に野菜や果物を積んで売りに来ている。本村では野菜や果物を自給することができないことがわかる。我々以外に外国人の訪問者はいない

かったが、数人の中国人観光客がいた。

本村のバス停には「929千軍台—地鉄蘋果園站」とあるので、地下鉄1号線の終点駅までバスで行くことができることがわかる。

千軍台村では、同村内の建物に「医務室」の看板とともに「農工総場千軍台分場」、「外来人口、出租房屋管理站」の看板も掲げられていた。また、最近になって、修復されたと思われる五道廟の隣には旧村民委員会があったと思われる建物がある。最近、その壁が白く塗られ、その上に赤色で「高挙毛沢東思想偉大紅旗奮勇前進」と書かれたようである。同村内では、一般の民家以外に「古樹」、「大台街道千軍台社区新居民服務站」、「中国共産党北京市門頭溝区大台街道千軍台社区支部委員会」などを見て回った。さらに、残念ながら、「千軍台村郷情村史陳列室」の看板が掲げられた建物の門は閉ざされており、参観することはできなかった。

なお、本村では初老の村民達が「千軍台村郷情村史陳列室」の近くの三叉路上で机と椅子を持ち寄ってトランプをしていた。どこから来たのかと尋ねられ、筆者が南京からだだと答えると、特に気にとめるようもなかった。中国人観光客が多く訪れているようである。ただし、やはり本村でも若者の姿を見かけることはなかった。

2) 天津市

9月15日(金)、事前予約していたホテル(京浜飯店)へ戻るための移動を済ませた後、高速鉄道に乗車して北京南駅から天津駅まで40分余りをかけて移動し、天津駅からは内山雅生・弁納才一・祁建民・田中比呂志・盧瑯・和田友美・佐々木麻衣の7人が2台のタクシーに分乗して約1時間をかけて天津市郊外にある南開大学の新校舎を訪問した。新校舎は、天津駅からはかなり離れており、また、途中で道に迷ったこともあり、到達するまでに想定以上の時間を要した。我々が南開大学歴史学院の建物の近くに到着すると、南開大学の新校舎の構内では、ちょうど新入生の「報名」(登記手続き)が行われていた。

南開大学歴史学院院长の江沛と意見交換を行った後、新校舎内を案内していただいた。その中でも、同歴史学院の資料室は史料や文献資料がかなり整備され、所蔵されていた史料・資料も充実していたように思われた。

その後、南開大学の旧校舎へ移動し、同学内のレストランで江沛・張利民(魏宏運先生⁶⁾の娘婿)・張思と歓談しながら、華北における料理としては味付けの濃くない上品な昼食をごちそうになった。

午後は、内山雅生の強い要請により、張思に案内していただき、南開大学歴史学院元教授の魏宏運先生宅を訪問すると、魏先生夫妻が2人そろって我々を出迎えてくれた。魏先生は「革命老幹部」ということで、家政婦が派遣されていた。ただし、魏先生は耳がかなり遠くなっていたのに対して、その夫人は極めて元気だった。魏先生は何度も三谷孝先生(一橋大学社会学部教授)が一生結婚せずに亡くなったことを残念だったと語っていた。

3) 山西省

3-1) 9月18日(月)

高速鉄道に乗車して北京西駅を出発して太原南駅で乗り換えて、靈石東駅に到着したのは昼過ぎとなった。そして、靈石のホテルで少し遅めの昼食を済ませた後、弁納・祁・田中・古泉・盧の5人がマイクロバスで臨汾市近郊の高河店村を訪問した。だが、当地の旅行代理店に予約していたマイクロバスはガス車だったためにあまりスピードを出すことができず、高速道路を利用したにもかかわらず、90km余り離れた本村まで約2時間を要した。

本村の周辺にはホテルやいくつかの高層マンションが建設されており、かつての風景とは一変していた。本村内の壁には「房屋出租」(貸部屋)の張り紙が多く見られた。また、同村周辺の道路が拡張され、同村の道路沿いの様子は様変わりしていたために、本村内を少し徘徊したが、かつて同村の副村長を務めていたRZGの自宅を訪ねて行った。その邸宅内の中庭ではRZQとRZGが木製の椅子に座って食べ物をつまみながら雑談をしていた。

しばらくの間、主に祁建民が上記の2人に最近の本村の状況や変化について話しを聞いた。そうした話しの中で、筆者がかつて何度か話しを聞いたことがあるRCSはすでに亡くなっているという。

その後、田中比呂志の提案によって、本村の廟を訪ねてみることになった。すると、廟の門には鍵がかけられていたが、しばらくして、その鍵を管理しているという女性にそこを開けてもらった頃には、本村民たちは我々がちょうど10年前に本村で聞き取

り調査したことを憶えていたようであり、その周辺には何人もの村民(主に老人)が集まって来ていた。そして、その中には田中比呂志氏からかつて聞き取り調査を受けたことを憶えていたZJG(74歳)も現れた。実は、その廟に隣接する家はZJGの弟の家であるという。ZJGは、いわゆる農村内の知識人・文化人であり、廟内にある石碑(記念碑)に名前が記されていた。

同廟内の片隅には、宗教・迷信用の焼紙(馬蹄銀を模したもの)がビニール袋に詰められていた。また、この廟にほぼ毎日のように参拝に来ているという初老の女性は、つい最近、団体旅行で日本(どの都市へ行ったかはわからない)へ行って来たという。しかも、孫が今年(2017年)の春から日本の大学(大学名は不詳)へ留学したという。廟に集まってきた老人たちは、我々に対して非常に好意的に接してくれた。そして、我々が廟を訪れる直前まで廟に来ていた五台山の高僧を自家用車で送迎していた尼僧が、我々に会うために急遽戻ってくると言い出している。是非とも本村の廟で待っていてほしいと言われ、その尼僧と歓談し、最後に護符(お守り)のようなものをいただいた。結局、我々が廟を訪問する直前に、廟の門の鍵を保管していた初老の女性はその尼僧と高僧を送るために廟の門の鍵を閉めて出かけていたということが判明した。こうして、我々がホテルに戻ったのは夜の9時近くになってしまった。

今回は、同村内の知人を訪問するという名目で、もっと早めに霊石のホテルを出発してもう少し時間をとって本村の老人たちから話を聞いてみたい。

3-2) 9月19日(火)

かつてH市水利局長のZAGから七里峪地区内の村落間にも四社五村のような「水利共同体」的な関係があるということを聞いていたので、これまで数年来、我々が参観を希望していた七里峪をH市水利局長のZAGの案内によってようやく参観することができた。ただし、今回は、結果的には同地区内の村落間に「水利共同体」的な関係を見出すことはできなかった。

今回、我々が訪問した際には、七里峪地区はほぼ全域が有料の自然公園のようになっており、その入り口にあたる料金徴収所では自動車1台につき60円と1人当たり20円の参観料金を徴収された。

山の斜面を蛇行しながら登っていく舗装された道

路は、最近になってようやく整備されたようだったが、道幅は非常に狭く、我々が借り上げたマイクロバスのようなやや大きな車は対向車と行違う際にやや難儀した。その山頂付近では、乳牛を放牧しており、所々に牛糞が散乱していた。

この放牧地の道路沿いには、「三眼窯烈士記念地」という立て看板が見られた。これは、つい最近建設されたように見えたが、この放牧地の奥にある関連するモニュメントも含めて、いつ、どの「単位」が建設したのかが全く記されていない。しかも、「抗日」烈士の「記念地」であるにもかかわらず、その看板には中国語・英語・ハングル文字の説明があったが、日本語の説明はなかった。「反日」で連携しようとしていた少し前の中国と韓国の両国関係を反映していたのであろうか。だが、アメリカによる韓国への「サード」の配備が決定して以降、中国と韓国の両国関係が急速に悪化し、例えば、中国人の韓国への観光旅行を制限している状況などからすると、やや違和感があった。そして、そこからの帰り道では、「修仙崖土匪窩」を参観するために、かなり厳しい急な石段を登らされて疲労困憊した。

さらに、山の斜面に家が建てられている七里峪村を参観した。同村内では修築改築をしている家が数軒あり、また、同村の入り口付近にはレストランを経営している家もあった。本村を貫通する幹線道路は舗装されていた。

七里峪地区には、「農家菜」(田舎料理)を提供するようなレストランや意味不明なモンゴル風の「ゲル」らしきものを設置してそれを売り物にしていた農村とその村民が経営していると思われるレストランなどがあった。

3-3) 9月20日(水)

当初は、終日、J村で聞き取り調査をする予定だったが、同村内で亡くなった人がいるので、聞き取り調査は午後だけにしてほしいという連絡が同村側からあったのを受けて、午後のみ聞き取りを行うことになった。そして、聞き取りを終了し、18:00から同村内のレストラン(現書記の弟夫婦が経営)で元書記(現書記の父親)らと食事をしながら、歓談した。その元書記には「介子推」という白酒を勧められた。夕食後、その元書記に勧められて亡くなった人を送り出す前夜祭的な演目(大音響でヘビメタ風の激しい演奏とともに、太い針金を首に巻き付けるなど、

かなり過激だった)が催されていたのを見学した。葬式は翌日に行われるという。

3-4) 9月21日(木)

午後、H市水利局長のZAGに案内していただいて、四社五村の1つのX村を初めて訪問することができた。2017年9月現在、本村の会首・村長はGXである。昔は廟だった(2017年9月現在、同廟内に入る側門には崩落の危険有りとの注意書きがあり、廃墟と化していた)という建物の正門のところは商店として利用されており、その壁にはX村「村規民約」(X村委員会)が貼られていた。そして、そのすぐ近くには「X小学」があった。

最後に、H市水利局長のZAGに案内していただいてD鎮J村を訪問し、同村書記のL氏に修復工事中の「娲皇廟」(2006年5月、國務院が全国重点文物保护单位に認定)やL氏宗祠などを案内していただいた。同村の約90%がL姓で、L氏一族は清代に七里峪から移住してきたという。同祠堂内には第5世の位牌が祀られていた。L氏宗祠は、J村小学校の敷地に隣接するところにあった。

IV. おわりに

今回は、H市水利局長のZAGにはずいぶんとお世話になった。例年のように、Y村にまで同行していただいたばかりでなく、新たにX村やJ村を案内していただいて訪問することができて、それらの村の幹部とも面識を持つことができた。さらに、Y村などの「四社五村」と同様に、水利共同体的な関係が残っているとされていたことから、我々にとっては訪問することが長年の念願だった七里峪(とりわけ七里峪村)を訪問することができた。

山西省L県G村で同村幹部から聞いた「戸口」制度に関する近年の変化は、極めて興味深かった。

北京市内の路上では、タクシーをつかまえるのがなかなか難しかった。今回、同行した中国人留学生たちによると、タクシーはインターネット上で予約(料金をネット上で事前にチャージして先払い)するようになっているという。中国社会が急速にインターネット化していることを痛感させられた。

今回、訪問した先々で公式的ないし表面的には「習近平」色とやや反日的な雰囲気を感じたが、我々と接した農村幹部や一般庶民の中には反日的な

雰囲気は全くなく、むしろ極めて好意的に接してくれたと感じた。

次回は、今回初めて訪問した山西省のX村やJ村で村の幹部(村長や書記)に村の概況などとともに、HJHの家族についても話を聞いてみたい。また、「村官」制度についても、とくに農村の幹部が派遣されてきた村官をどのように見ているのかを聞いてみたい。さらに、久しぶりにD村にも訪問してみたい。

注

- 1) 科学研究費助成事業(基盤研究(B)(海外学術調査)2013年度~2017年度「華北農村訪問調査による近現代中国農村社会経済史像の再構築」研究代表者: 弁納才一, 課題番号25301029).
- 2) 和田友美(金沢大学人間社会学域国際学類アジアコース4年生, 2015年9月~2016年7月: 北京師範大学留学)・佐々木麻衣(金沢大学人間社会学域国際学類アジアコース4年生, 2015年9月~2016年7月: 北京師範大学留学)・郭允哲(金沢大学理工学域数物科学類4年生, 2017年9月~2018年7月: 大連理工大学留学)・久積龍一(北京大学歴史系留学). このうち、2015年9月から北京師範大学に留学していた和田と佐々木の2人は、保定市農村に同行している(弁納, 2016, 162~165).
- 3) 河北省通県小街村については、拙稿「中華民国期北京市近郊農村における経済発展と都市化」(大阪経済大学日本経済史研究所『経済史研究』第18号, 2015年1月)を参照されたい。
- 4) 沙井村については、戦前、内田智雄によって調査が行われ、満鉄北支経済調査所編『北支慣行調査資料之部 第108輯 家族制度篇 第17号』(1942)として刊行され、三谷孝らが1990年8月と1994年8月に再調査を実施し、その成果は三谷孝編『中国農村変革と家族・村落・国家—華北農村調査の記録—』(汲古書院, 1999)と三谷孝ほか『村から中国を読む—華北農村五十年史—』(青木書店, 2000)に所収されている。
- 5) 門頭溝は、苑平県に位置し、「河北省一帯の養蜂熱の波に乗り一時非常に養蜂業の勃興を見た」ことがあり、また、「河北省有数なる炭坑を有」し、炭坑周辺の村々から「石炭採取の為出稼ぐもの」も多かった(南満州鉄道株式会社天津事務所調査課, 1936: 河北省農業調査報告(一)(平漢線「北平—保定」沿線及其西部地帯), 北支

経済資料第25輯, 12-30).

- 6) 筆者が魏宏運先生と最初にお会いしたのは、まだ大学院生だった筆者が斎藤道彦氏(中央大学経済学部教授)の主催する五四運動研究会に参加し、招聘された魏宏運先生が報告されたのを拝聴した時だったと記憶しているが、魏宏運先生はもちろん筆者のことを全く記憶にはないであろう。

文 献

- 弁納才一, 2008: 華北農村訪問調査報告(1) - 2007年12月, 山西省太原市・霍州市農村 - . 金沢大学経済論集, **29** (1), 269-282.
- 弁納才一, 2010: 華北農村訪問調査報告(2) - 2008年12月, 山西省太原市・平遥市・霍州市の農村 - . 北陸史学, **57**, 1-17.
- 弁納才一, 2011a: 華北農村訪問調査報告(3) - 2009年12月, 山西省P県の農村 - . 日本海域研究, **42**, 113-121.
- 弁納才一, 2011b: 華北農村訪問調査報告*(4) - 2010年8月, 山西省P県の農村 - . 金沢大学経済論集, **31** (2), 193-208.
- 弁納才一, 2011c: 華北農村訪問調査報告(5) - 2010年12月, 山西省の農村 - . 金沢大学経済論集, **31** (2), 157-175.
- 弁納才一, 2012a: 華北農村訪問調査報告(6) - 2011年8

- 月, 山西省の農村 - . 金沢大学経済論集, **32** (1), 173-194.
- 弁納才一, 2012b: 華北農村訪問調査報告(7) - 2012年8月, 山西省の農村 - . 金沢大学経済論集, **33** (1), 289-307.
- 弁納才一, 2013: 華北農村訪問調査報告(8) - 2013年8月, 山西省の農村 - . 金沢大学経済論集, **34** (1), 217-239.
- 弁納才一, 2015a: 華北農村訪問調査報告(9) - 2014年8月, 山西省の農村 - . 金沢大学経済論集, **35** (1), 149-168.
- 弁納才一, 2015b: 華北農村訪問調査報告(10) - 2014年9月, 河北省・山東省の農村 - . 金沢大学経済論集, **35** (2), 71-95.
- 弁納才一, 2016: 華北農村訪問調査報告(11) - 2015年9月, 河北省・山西省の農村 - . 金沢大学経済論集, **36** (1), 161-185.
- 弁納才一, 2018: 華北農村訪問調査報告(12) - 2016年9月, 雲南省・河北省・山西省 - . 日本海域研究, **49**, 89-98.
- 補記: 本稿は, 科学研究費助成事業(基盤研究(B)(海外学術調査)2013年度~2017年度「華北農村訪問調査による近現代中国農村社会経済史像の再構築」研究代表者: 弁納才一, 課題番号25301029)及び科学研究費助成事業(基盤研究(B)(一般)2018年度~2022年度「社会主義経済体制下の中国農村における社会環境の特質と変容に関する再検討」(研究代表者: 弁納才一, 課題番号18H00876)による研究成果の一部である。